

旅における学生の「学び」¹⁾

—「新・文明の旅」プログラムを事例に—

野 口 由 雄*

[abstract] In 2010, Bunkyo Gakuin University celebrated its 20th anniversary and the 85th anniversary of its founding institution (Bunkyo Gakuen). In 2024, Bunkyo Gakuen will celebrate its 100th anniversary. To mark this centennial, Bunkyo Gakuin University launched an ambitious project: "Road of Eurasian Civilizations" – BGU Students Overseas Study Tour. Before our centennial anniversary, Bunkyo Gakuen will embark on a REC program tour five times, i.e., every three years. The aim of this project is to send our selected students to many countries in the Eurasian continent to learn about their cultures, histories and contemporary societies, as well as to experience cultural exchanges with students of several local universities they visit. These study tours can provide the students with far-reaching experience and contribute to their development. The first tour of this program visited Turkey, Bulgaria and Romania in March 2012 and our 17 BGU students (15 female students and 2 male students) took part in the tour. This paper reports and evaluates the program itself and its effectiveness. In addition, it tells you what the students who took part in the program have learned from the REC study tour.

1. はじめに

近年若者は、安定した日本の内側のことばかりに目を向けて、以前のように海外に目を向けなくなりつつある傾向がある。この姿勢は、入学前の高校における生活体験を例に挙げると、自分の思うとおりにならない「外部」をさける姿勢にあり、生徒たちの「異なるもの」への消極的な姿勢として学校生活の中で知見されていた。²⁾ 現在、グローバルな視野から見た生活体験上の問題点について、「関わり、つながりの希薄化」「体験の欠如」「生きる力の衰退」の3点に関する指摘がある。21世紀の多文化共生社会では、理解できない、違和感を持つ他者とも関わるのが求められ、この関わりを持たせる体験を学校教育に意図的に取り入れることが重

* 教授／国際理解教育

要である、という。³⁾ 本学では、これらの問題を抱えた学生、そして多様な学力差のある学生に対し、学士課程教育の中で、より多くの学生にそれぞれの能力を高め、社会に貢献できるように指導するための具体的な取組の導入が課題となっている。

そこで、本学独自の教育プログラムとして、「新・文明の旅」プログラムを立案した。これは、本学の教育力向上を目的とするプログラムとして位置づけられ、また、本学が100周年(2024年)を迎える際の周年行事を絡めた長期企画の一部でもある。同プログラムの目標は、「多様な国々の異文化を受け入れ、ともに考え、外に向かって自己と日本を発信し、多様な情報をキャッチし、新たな創造ができる人間を養成する」ことである。その目標実現に向けて、ユーラシア大陸にある各々3～4か国を訪問する旅を3年間ごとに催行し、各地元大学生と双方向交流を行うことをプログラムの中核として実践している。

この「学び」の旅は、事前学習・旅の「学び」・事後学習という、一貫した教育力向上への取り組みに特色がある。事前学習では、全学共通科目として、旅への参加を希望する3学年の学生が混在する「特別講義」2科目を前・後期に開講する。約3週間の旅では、現地の各大学において双方向の交流を行い、学びあう。旅から帰国した次年度、派遣された学生と次回参加希望の学生が同じ「特別講義」を受ける。その授業の中で、派遣学生は自らの学びを後輩たちに伝承していく。本稿では、同プログラムの特性と旅における派遣学生の「学び」について言及する。そこで、「学生は旅から学ぶことができるか」を考察する。

2. 「新・文明の旅」プログラム

2.1 プログラムの概要

「新・文明の旅」プログラムは、文京学院大学の創設20周年に当たる2010年から、文京学院の創立100周年となる2024年に向けて、長期間に及ぶ教育力向上を目指す「旅のプログラム」であり、且つ学園の周年行事の一部として計画された。これは、目の前にあることだけでなく15年後の完結という計画により、中・長期を見据えた視点を持つ本学の理念の一端を示したものである。同プログラムは、学内の恒例行事となっている学生が京都三条大橋から東京日本橋までを、各区間で様々な取組を行いながら踏破する「東海道53次ウォーク」(現在は五街道ウォークと改名)と重ね合わせて考え、その世界版といえる「旅のプログラム」でもある。(ただし、同プログラムは全ての行程を踏破しようというものではない)

この長期計画では、創立100周年までに、全学から選抜された約20名の学生・教職員集団が、ユーラシア大陸を東ヨーロッパから旅を始め、ロシア、中国そして朝鮮半島まで、3年に一度2週間～3週間の期間を費やし、3～4か国を訪問する。第1回は、トルコからスタートし、ブルガリア、ルーマニア⁴⁾を訪問した。第2回は、ユーラシア大陸にあるウクライナ、ベラルーシ、そしてバルト三国等を訪問(予定)し、その後はロシア、インド、中国及びその近隣諸国を訪れ、それぞれの国の文化や風土にふれ、各国にある大学において同世代の学生と交流して

いく。各訪問国における多様な文化や歴史を学ぶとともに、学生が日頃学び、身につけた事柄を伝え、お互いに学びあう。

同プログラムでは、グローバリゼーションに代表されるアメリカの視点からのみではなく、日常的に情報を得ることが少なかったユーラシア大陸について多様な視点で学んでいく。これまで触れたことのなかった異なる知識を身につけ、何かを創造することができ、自己と日本を発信できる人間を育成することを目標の中核に掲げている。

2.2 教育プログラム概要

同プログラムの教育面の特徴である「学び」として、事前・事後の学習について言及する。2011年度は、前期科目に「新・文明の旅特講－a」、後期には「同－b」を設けた。全学共通科目とし、選択科目の1つとして設け、旅への参加を希望する3学年の学生と一緒に学ぶ授業を実施した。同授業は、2キャンパスで同時展開をするため、大型モニターを使用する「テレビ会議システム」⁵⁾を導入した。

「新・文明の旅特講－a」では、同授業の講師に本学理事長はじめ本学の教授陣、各訪問国大使館より招聘した参事官、在日の訪問国の人物、そして日本の大学院で学ぶ国費留学生を依頼した。よって、授業形式をオムニバスとし、多くの授業で、学生参加型の授業システムを実施した。そこでは、各訪問国の政治、経済、民族、宗教、教育、社会諸制度、歴史的背景等の指導に加え、各国における現在の社会情勢が、その国の人物によって語られた。受講学生は各授業でそれぞれの講師から課題を与えられ、絶えず自分の考えを発信することが求められた。

「新・文明の旅特講－b」では、旅に派遣される学生は全員が各訪問大学の交流プログラムで、各自のテーマに沿った発表をすることが義務づけられているため、その指導に力を入れた。前半は数名のグループに分かれて、それぞれが日本、自分を発信できるテーマ設定をし、グループプレゼンテーションを実施した。次に、各学生が自ら学んでいる学問領域や、それぞれの研究・学習成果をテーマに、個人プレゼンテーションを実施した。受講学生は各学部の教員から指導を受け、各訪問大学で充実した発表をするため、入念な準備作業に努力した。また、それぞれの発表ごとに、発表学生と聴取する学生間で意見・情報交換が行われた。更に教職員からの助言・指導においては、授業を離れて多くの指導時間が使われた。この授業における指導は、全体としてアウトプットを中心に展開した。

2.3 プログラム導入の背景

同プログラムを導入する背景として、学生の気質についての変化、生活上の問題点について、1.はじめに－で触れた。一昨年「日本を飛びぬけ若者」というタイトルで、日本人学生の内向きになってしまった姿勢に警鐘を鳴らした記事⁶⁾を取り上げた。しかし、この傾向が急速に変化した様子も学内からは知見できない。このような学生には、外に向かって積極的に学ぶ姿勢や、その学びへの「気づき」を与える必要性がある。

本学は、自立した人間として、共生社会の実現に寄与できる資質と能力を備えた人材の養成を教育目標としている。この教育目標実現に向けて、「理論と実践を両面から学ぶカリキュラム」「社会参加・実習を取り入れたカリキュラム」を重視する。そして、建学の精神である「自立と共生」の理念を理解し、実践させる。これによって、国際社会に通用する幅広い教養と技能を身に付けた、社会に貢献できる人材を育成することを目指す。よって、この大学の姿勢が同プログラム導入への背景でもある。

2.4 プログラム実現への取り組み

大学全体で取り組む同プログラムは、2009年度末に理事会の諮問を受け、実行委員会ができる前に「新・文明の旅プロジェクト準備委員会」が設置された。多方面における事前の調査を行い、プログラム全体の骨格としての教育目標、旅における訪問国、その旅の実施時期・期間等が検討された。この内容が、理事会、大学運営会議（学園長、学長、副学長、各学部長、各理事等で構成）で承認された上で、2010年7月に「新・文明の旅プロジェクト実行委員会」が正式に教職協働で設置された。筆者は同委員会の委員長を委嘱された。

本学4学部1学科の専任教員の中から実行委員として8名が選出され、職員からも各部署から20名が委員として任命された。委員の中には、理事として2名が加わっている。組織体制、人員配置、予算措置その他については、理事会、大学運営会議、各学部教授会の承認の上で、実施された。本学教務委員長会議において、旅における「学び」のための事前・事後学習である「新・文明の旅特講-a」「新・文明の旅特講-b」「新・文明の旅総合講義」の3科目が全学共通科目・選択科目として、正規の授業として認定された。筆者は同講義のコーディネーターと、学生の成績評価の責任者に委嘱された。

計画実現にあたって、「新・文明の旅プロジェクト実行委員会」は発足から2012年8月現在まで、月1回の割合で全体会議を行ってきた。さらに、実行委員会の中には各部門（「訪問国渉外委員会」、「授業化・学生選定委員会」、「経費検討委員会」、「広報委員会」）が設けられた。それぞれが頻繁に部門会議を行ってきている。3か国訪問の旅においても、委員会メンバーである教員3名と職員2名が随行し、それぞれの役割分担をし、旅の円滑な遂行、学生指導に当たった。筆者はその学生引率の責任者を担当した。2012年度は、旅に派遣された学生を中心にして、オープンキャンパスにおける受験生に対する同プログラムの紹介や、学内における各報告会が実施されている。前期は、これらの報告会と共に「新・文明の旅総合講義」における学生の指導・評価が中心的活動となった。

3. プログラムの特徴と教育力

3.1 プログラムの特徴

従来の多くの留学・研修プログラムは、米国、西欧先進国、オセアニア英語圏等の国におけ

る語学留学・研修と、それに現地の人々との交流が加えられるものが中心である。近年それらのプログラムに中国への留学・研修が仲間入りした。同プログラムでは、それらのプログラムで学ぶことができる以上のものを参加学生が学び、習得できる。

同プログラムの目標は、1.はじめに－にある「多様な国々の異文化を受け入れ、ともに考え、外に向かって自己と日本を発信し、多様な情報をキャッチし、新たな創造ができる人間を養成する」ことである。この目標を実現するために、「理論と実践を両面から学ぶカリキュラム」と「社会参加・実習を取り入れたカリキュラム」が必要とされる。これは、2.3 プログラム導入の背景-で紹介した本学の教育における特徴である。よって、同プログラムは、この点において、本学独自の教育プログラムといえる。

特徴の一つは、一定期間の中で異なる文化圏数か国を訪問することにより、異文化・自国文化への理解を深化・拡大させ、学生の視野を大きく広げられることである。次に、欧米文明に影響された日常生活とは違った環境で学ぶ訪問大学生との交流の機会は、両学生にとって新鮮であり、単に発信・受信力を醸成するだけでなく、新たな創造力を生み出す「気づき」を得ることができる。同時に、その環境で学ぶ学生との共同生活は、その国の生の社会状況を知ることができ、それぞれの国情を比較するなかで、それらを考察することができる。

さらに、各学部から派遣された本学生たちは、それぞれの学問領域を深めると同時に、他学部の学生とそれらの情報を共有することができる。そして、そのことによって他者に対しての尊敬が生まれ、協調性を育みながら、集団としての団結力を短期間のうちに醸成できる。これは、実際に同旅から帰国した後、派遣学生たちは両キャンパス間の相互交流や各学部間の相互理解を深めることに貢献している。よって、同プログラムは、単なる海外研修プログラムではなく、「学士力」・「人間力」を同時に高めていく、参加型のアクティブラーニング⁷⁾における1つの新しい教育モデルである。

3.2 教育プログラムとして

2.1プログラムの概要－の中で、「長期間に及ぶ教育力向上を目指す旅のプログラムであり、学園の周年行事の一部としても計画された。」と言及した。その教育力向上という視点で、より詳しく同プログラムの特徴を a. からf.にまとめてみた。

- a. 欧米に比較して情報量の少ないユーラシア大陸にある特異な風土を持つ数か国について、それぞれの文化や歴史等を学ぶことが出来る
- b. 旅においては、訪問する、(予定する)数か国の大学は、それぞれの国を代表する名門大学である。そこで学ぶ学生と交流し、彼、彼女らの知的好奇心から「学び」への刺激を受けられる
- c. 本学2キャンパス・4学部1学科を横断する全学共通科目として、1学年から3学年の学生を対象に実施される。よって、授業ではそれらの学生が混在し、それぞれが情報を共有

し、且つ刺激しあうことができる。

- d. 事前学習における授業では、訪問国に関係する外部講師が招聘され、その講師から直接学べると同時に、訪問予定大学の学生とはスカイプを通して交流ができる。
- e. 学生参加型の授業であり、旅の派遣に対する独自の選抜過程では、発信することを中心とした評価も加わり、積極的授業参加の姿勢が生まれ、学生同士が刺激しあうことができる。さらに、そこで、訪問大学で予定されるプレゼンテーション能力を鍛えることが出来る。
- f. ユーラシアの国々を約2、3週間かけて数か国訪問する旅の行程では、集団が分かれることもある。よって、派遣学生たちは、それぞれの交流プログラムにおいては多種・多様な異文化・交流体験ができる。

これらの特徴に加えて、訪問国学生との交流を、スカイプ、SNS等ITCを活用して継続的行うことにより、長期間教育効果を発揮する交流プログラムに発展できる。実際に、旅を終えた直後、訪問大学の学生数名が来日する計画を立てているので、この実際の交流も該当学生とその仲間だけの体験ではなく、その交流が学内の雰囲気活性化させる。

同プログラムは、さらに、教員間との双方向の交流として、今までの共同研究プロジェクトとは別に、ユーラシア地域の大学研究者との国際共同研究を進める新計画に発展していく。これらも加えた交流は、全学的規模となり、将来まで継続して行くと考えられる。よって同プログラムの成果は、そのような流れの中でも積極的な役割を演じる。

3.3 学生によるプログラム評価

同プログラムで旅に派遣される学生には、渡航費用、滞在経費が本学より支給される。これは大いなる特徴であり、学生にとっての魅力ともなっていた。それに加えて、受講学生は同プログラムの特色ある内容に対して、その魅力を考察した。

2.2 教育プログラムとして－にある a. から f. に関して、受講学生の一人が⁸⁾ 事前学習の授業におけるプレゼンテーションで、通常の留学と同プログラムを比較、分析した内容を発表した。同学生の発表を一部補足して、その発表内容について言及する。

通常学生が参加する短期・長期の留学経験によって向上が見込まれる「能力」・「技能」・「理解」を以下の5項目と考えた。

・語学力 ・受信能力 ・発信能力 ・異文化理解 ・(自国)文化への深い理解

同プログラムでも、上記5項目は同じように向上が見込まれると考えた。しかし、これに加えて、次の4項目を考えた。①協調性 ②団結力 ③創造性 ④視野の拡大 の4つの「能力」・「技能」・「理解」の向上である。それぞれの項目について、次のようにその要因を考察した。

- ① については、特徴 c. にあるように4学部1学科、3学年からの学生が混在するので、単なる同好・同質の学生が集まったサークルのような集団とは異なり、異質の存在が授業の中

で学びあう。しかし、旅における様々な交流イベントを成功に導くために協働しなければならない。よって、①の協調性が常に必要不可欠なものになり、そこで協調性が育つと考えた。

- ② については、b. e. f.を通して、それぞれが協力して立ち向かわねばならない学生集団であることを認識する必要がある。また、旅の中でも大いに②の団結力を増強させることが必要となり、それが育つと考えた。
- ③ については、事前学習から欧米一辺倒の基礎知識が偏向していたことを認識することにより a. d. に関する学習が、別の視点で考えることを可能にさせる。
- ④ に関しては、b. c. d. f. はそれぞれ主体的に学習することになり、それらが相乗効果を発揮すると考えた。

同プログラム独自の、向上すると見込まれる項目①～④に関して、①、②については、同旅の間はもとより、帰国後に期待以上の成長を学内の諸活動の中で知見した。また、③、④に関しても、すべての派遣学生に対して、帰国後の報告会や、オープンキャンパスでの行動・態度等に、個人的な差は見られるが、それらの向上・変化・成長を知見した。

4. 事前学習・訪問国への旅・事後学習

4.1 事前学習：「新・文明の旅特講－a」・「新・文明の旅特講－b」・講演会

事前・事後の講義を開講するまでには、「新・文明の旅プロジェクト実行委員会」、特に「授業化委員会」によって、授業内容、各講師の選定・依頼・招聘などに多くの時間が費やされた。そして、同講義はテレビ会議システムを利用することにより使用教室が限定されたため、受講できる学生数が限られた。そのために希望者から受講生を選抜ことになった。2010年12月に2回にわたって同プログラムの説明会が行われた。そこには両キャンパス、4学部1学科合計約140名の学生が参加した。それらの学生に、この旅への関心と参加の意欲を問うレポートを提出させた。そして、約80名の提出者の中から、各学部の教員を中心とした「学生選定委員会」のメンバーにより、意欲・関心の高い学生52名が授業受講者として選抜された。

2011年度は、前期授業に「新・文明の旅特講－a」、後期には「同－b」を実施した。全学共通科目であり、選択科目でもある。同授業には旅への参加を希望する3学年の学生が混在し、2キャンパスをつなぐため各教室に大型モニターを使用するテレビ会議システムが導入された。各授業は、本学園理事長、本学教授4名をはじめ、年間全30コマの講義を延べ約90名の講師が担当した。また、ITや広報関係者など約120名のスタッフもこれらの授業をサポートした。講師陣には、他大学からの講師、トルコ・ブルガリアからは各参事官、通訳、そして訪問予定の各国から日本在住の外部講師3名、さらに4名の各国国費留学生在が加わり、授業形式はオムニバスとし、学生参加型の授業を中核として実施した。

前期授業では、各訪問国の政治、経済、民族、宗教、教育、社会諸制度、歴史的背景等の指導に加え、各国の社会情勢がその国に生まれ、育った講師によって語られた。また、受講学生には7冊の課題図書⁹⁾が与えられ、約70時間の読書・その読後感想レポートの提出が求められるなど、絶えず自分の考えを発信することが要求された。

後期の授業「新・文明の旅特講－b」では、スカイプやSNS、その他のITCを使って、訪問国学生との交流が実現できた。特に、スカイプを使った日本語を話す外国人学生との交流は本学生の異文化への興味・関心を刺激した。アウトプット中心の授業内容とするために、その導入部として、本学教員に「異文化コミュニケーション」の授業を、招聘講師の本名教授（本名 信行・青山学院大学名誉教授）による授業では「国際語としての英語・世界英語としての英語」¹⁰⁾に関する内容の指導を受けた。これらの授業によって、受講学生の英語によるプレゼンテーションに対する積極性を助長することができた。同教授からは、同プログラムに対して「世界・国際英語を統合的に学べる英語教育の理想的なプログラムである」と、評価された。その後の授業では日本文化をテーマに発表するグループプレゼンテーションや、各学生の専門領域に関する個人プレゼンテーションを実践した。それぞれのプレゼンテーション後に、受講学生自身が各プレゼンテーションを講評・評価する指導内容を加えた。

同授業における指導は、テレビ会議システムによるキャンパス間の諸問題¹¹⁾も生じた。それらは改善すべき内容として学生からの声としてもあがった。しかし、離れた2つの場所で約50名が同時に学ぶ教育環境の中でも、学生には全体として高い授業評価を得た。同受講学生の「学生による授業アンケート」(5.1－参考資料1)結果からは、「この授業で向学心を掻き立てられたか?」の項目には、4.73 (5.00点評価)、「この授業は、総合的に満足いく授業であったか?」の項目には4.63など、高い満足度が見られた。

両授業に加えて、訪問国である各国の、ブルガリア大使、トルコ大使、そして訪問大学のアンカラ大学長を招いた各訪問国に関する講演会を、本学の全学生を対象として3回実施した。

2010年10月16日に駐日ブルガリア共和国特命全権大使リュボミル・トドロフ大使をお招きし、「ブルガリアの歴史・文化と現代社会」というテーマによる「新・文明の旅記念講演」を実施した。この講演には同プログラム参加希望の学生を含めて、学生約110名と関係者40名が参加した。これを機に、同プログラムにおける実際の活動・指導が開始された。

2011年10月15日本郷キャンパスで、第2回目の「新・文明の旅」プログラム講演として、駐日トルコ共和国臨時代理大使のアングル・サブリ・トゥンチュ大使をお招きして、講演会を開催した。ここにおいても受講生はトルコの歴史、日本との交流の歴史等を学ぶことが出来た。

また、2011年11月11日、トルコのアンカラ大学より、タルー学長をはじめ4名の同大学関係者が来日され、同学長から「トルコ共和国－日本との交流とアンカラ大学」についてと、独立行政法人日本貿易振興機構(ジェトロ)前イスタンブール所長石原圭昭氏から「トルコ経済とビジネス環境」という演題の講演会を開催した。講演後は同プログラム受講生が、アンカラ大学訪問時に同大学生と交流するプログラム企画の一部をタルー学長の前で発表した。同時に、

自治会学生と受講学生有志によるトルコ地震被災地支援のための募金活動状況を報告した。

受講学生は、事前学習としての授業のみならず、訪問国の学生との交流、そして訪問国に関する現実味のある講演内容からたくさんの情報を吸収した。同学生は、欧米を通じて世界を見るという惰性から抜け出し、ユーラシア大陸の多様な問題を学ぶことで、これまで触れることのなかった情報を身につけ、多様な視点でものを見ることができる異文化理解を育んだ。それと同時に、この「学び」によって何かを創造する力を培った。また、異なる環境で自らの「学び」を発表する準備をする事前学習の体験においては、自己と日本を発信できる「学士力」・「人間力」を醸成できたと知見した。

4.2 訪問国への旅

2012年2月29日、全学部 of 全受講生の中から、数回の面接・試験を経て選抜された17名の派遣学生に5名の教職員が随行し、3か国訪問、トルコのアンカラ大学、ブルガリアのソフィア大学・タルノヴォ大学、ルーマニアのアレクサンドル・イオン・クーザ大学との相互交流への旅に出発した。各訪問大学では大歓迎を受け、各大学では、派遣学生全員がそれぞれの研究・学習成果をプレゼンテーションし、そしてそのテーマに関する討議をし、相互交流を深めた。

アンカラ大学の交流授業には同大学生約35名、学長初め教職員10名が参加し、ブルガリアではそれぞれの大学で約20名の同大学生、教員各5名が参加した。多くの学生たちは、各自の授業の合間をぬってこの交流に参加していた。各担当教員によると、日本語学科のある上記大学の日本語授業履修者は、同授業に参加してくれた学生数の3、4倍にあたるという。

最後の訪問国ルーマニアのアレクサンドル・イオン・クーザ大学には、日本語学科が設置されていないが、同大学の日本文化に関心のある市民グループ¹²⁾に所属する学生たちが、訪問初日に「ひなまつり」という日本文化紹介のイベントを企画してくれた。また、同大学の学生寮を使用することも可能となり、同大学での学生交流や授業参観も充実したものとなった。ここでも、他大学と同様の相互交流授業を実施することが出来た。

今回の訪問時期は、平成23年3月11日に起きた東日本大震災から1年目に当たる時期と重なる。よって、世界的な大災害として、各国メディアに大きく取り上げられたこの問題に対して、その大災害後の復旧・復興の取り組みの現状を、本学生が世界に発信できる機会ととらえた。そこで、同プログラム事前学習の受講学生に、本学の被災者ボランティアに取り組んできたサークル・ゼミのメンバーを加えた「新・文明の旅ボランティアチーム」を発足させた。そして、このメンバーで岩手県遠野市の被災地支援にボランティアとして参加した。

同チームのメンバーは、そこで活動している人たちを取材し、これをトルコ、ブルガリアの訪問国3大学の学生にインターネットを使って伝え、課題や問題を訪問大学の学生と派遣学生を加えて話し合い、この問題を共有した。この東北被災地で活動する学生とリアルタイムで、スカイプを使用して相互交流したプログラムは、各訪問国の学生に対して、大震災の復旧・復興の状況をリアルに、且つ印象深く伝えることができた。訪問大学における各教室では、涙を

流してその画像を眺め、本学学生の経験談に熱心に耳を傾けていた学生が数多くいた。この交流は情報の交換のみならず、訪問国学生の日本への理解をさらに深いものにさせた。

3か国、4大学の学生との交流を中心とした17日間の行程を予定通り遂行し、訪問先では随所で各学生の協調性が発揮され、派遣学生の団結力も一段と強いものとなった。各訪問大学からは次年度に再度訪問をしてくれるよう希望されるなど、各訪問大学生とその関係者に好感を持たれた。これは同学生たちの豊かな「人間力」養成という目標を実現した結果の一端である。

第1回の大学間交流先となったトルコのアンカラ大学、ブルガリアのソフィア大学・タルノヴォ大学、ルーマニアのケーザ大学は各国を代表する大学である。この学生たちは極めて優秀であり、意欲的である。これらの学生と対等に交流するために、参加する学生には、学習成果のレポート、発表のための企画書作成、プレゼンテーション、質疑応答が出来る力等の向上を求めてきた。また、自らが行うプレゼンテーションを数回実施、お互いにそれらをコメントする機会の設定、スカイプによる交流など、学生主体の授業形態で指導した。このことにより、学生は発信力と共に質問する力を育成できた。全ての学生が旅への参加を懇願している状況から、競争心も芽生えた。また、この旅への参加を実現しようと、日々の授業に脱落せず、目を輝かせて学業に励むことにより忍耐力をも養うことができた。

旅への参加を実現した学生は、3か国訪問により多様な文化を多方面から生で学び、知識欲旺盛な訪問大学生からは、それに対して絶えず自分の考えを持って発信することを求められ、その力が鍛えられた。同時に、それらの学生の意見に耳を傾けることにより、たくさんの知識を吸収できた。さらに、異文化に対する疑問を抱えると、それを現地学生と共に学び合うことを通じて、より深いコミュニケーション力を身に付けることができた。また、訪問国での現地学生との同居生活は、一般的な語学留学等で行われているホームステイのプログラムとは違い、短期間に、集中してその国情を知るまたとない機会となり、真の国際理解力を醸成できた。

これらの体験を積んだ本学生は、学内のいろいろな場面でこの旅の帰国報告を求められている。そして、彼らの学内における姿勢・行動・活動は、本学生の海外留学等への興味・関心を刺激すると同時に、目標を見いだせない学生や不本意入学生のやる気を引き出す副次的な効果を学内にもたらすことも期待できる。

4.3 事後学習：「新・文明の旅総合講義」

2012年度前期の「新・文明の旅総合講義」は事後指導の中核であった。この授業も全学共通の選択科目である。同授業では全体を通して学生主体の授業を作りあげるよう努力した。基本的に昨年度同様、両キャンパスを結ぶテレビ会議方式を使用した。東欧3か国に派遣された学生と、東北被災地に派遣された被災地ボランティア学生に、同プログラムで発信してきた内容をさらに充実させるべく、その改善してきたものを発表させた。そこでは、同授業に参加している1年生を含む全生徒にそれらに対する意見を求めた。受講学生全体に、「この体験で何を身につけたか?」を考えさせ、彼ら、彼女らの「発信力」・「情報収集力」・「発想力」を再評価

した。

一年生を中心とした受講生は、その派遣学生の「学び」を伝承する。そして「このプログラムで身につけることは何か?」「私が参加するなら、こうしたい、こう伝えたい!」を考えさせて、発表させた。ここでは「発信力」に加え、「理解力・質問力」を評価した。

後半の授業では、各訪問国別のグループを作り、パネルディスカッションを中心にした。前年の講義で指導を受けた招聘講師や、訪問国から日本に來ているお世話になった人たちを会場に、コメンテーターとして招聘した。トルコのグループは、「東日本大震災」を、ブルガリアは「英語教育」を、そしてルーマニアでは「仕事に対する価値観」をテーマに問題提議し、それをグループで話し合った後にテレビ会議を通して両キャンパスで報告、討議した。ディスカッションでの時間管理も回を経るごとに、しっかりとできるようになった。各招聘講師からのコメントも参加学生にとって有意義であり、多くの教育的な効果があった。

最終週には、1年生全員が各テーマでプレゼンテーションをした。そして、最後には受講者全員に「最終レポート」を提出させ、それを評価した。

1年生の発表は、短期間の準備期間であったにもかかわらず、各学生の発表内容、発表手順はまとまっていて、その技量に上達が見られた。これは、3週前に、派遣学生と1年生それぞれのペアを作り、各上級生がその1年生を個人的に指導した。この期間に1年生が授業外の時間を使って指導を受けたため、その指導の効果が各発表に表れていた。また、この指導は派遣学生である上級生にとってもよい「学び」になったと知見した。

5. 「学び」の成果

このプログラムにおける「学び」によって、教育目標である、「多様な国々の異文化を受け入れ、ともに考え、外に向かって自己と日本を発信し、多様な情報をキャッチし、新たな創造ができる人間を養成する」ことが十分できたかを考察する。ここでは、「学生による授業評価」、「帰国後アンケート」(帰国後約1か月後にウェブ上で調査回収)、「クロス集計」(調査結果2種類)4つの集計結果を使用した。(参考資料1-4) それらの集計結果として数字に表れているものと、学生の言葉を加えて言及する。

5.1 「学生による授業評価」・各講義による「学び」

本学では、各学期に自己点検・自己評価委員会とFD委員会によって、全授業に対して「学生による授業評価」が実施されている。この集計結果に対しては、各教員がコメントを記入し、それを学生に公開している。この調査結果を使って、事前学習の前期授業について言及する。そして、同プログラムの教育目標である「学士力」・「人間力」をどれくらい醸成できたか、学生はこの学習にどう取り組んだか、事前・事後学習の全授業について言及する。

事前学習の前期授業については、参考資料として「新・文明の旅特講-a」における本郷キャンパスの受講学生による「学生による授業評価」を使用した。4.1 で一部を紹介したように同

調査結果には受講学生の授業に対する高い満足度が見られた。これは調査対象が前期の事前学習の授業科目なので、旅への参加を希望する意欲が現れた。また、履修者33名の全員が回答者ともなっていた。これは、最終週の授業にもかかわらず全員が出席をしており、いかに欠席が少ないかを示していた。これにも同様の要因が考えられる。(参考資料1)

教員(講師)に対する評価については、各講師はそれぞれの分野における専門領域を集約した内容で指導するオムニバス形式をとった。そして、その1回きりの出会いである新鮮さがよい印象も持って評価された。また、調査用紙に「現地の人から直接話を聞いたことが新鮮だった」との記述があったように、多くの講師が訪問国出身の外国人であったことも学生の高い評価に結びついていた。学生の授業参加に対する積極性が高い数値で表れていることに関しては、旅への参加意欲が関係している。よってこの数字は後期になって各項目について、それぞれ約0.2ポイント低下した。

前期の受講学生は、各訪問国の政治、経済、民族、宗教、教育、社会諸制度、歴史的背景を中心に学んだ。しかし、派遣先での活動、交流においては、その指導してきた各訪問国に関する基礎知識の定着が不十分であると思われる言動や現地学生とのやり取りを数多く知見した。このことは学生の反省にもあった。これらの内容を指導する時間を増加すると同時に、知識の定着を確認する必要がある。

後期の受講学生は、参加意欲の減退等様々な理由から、約40%の履修者の減少があり、32名となった。この減少は、同プログラム作成当初からの問題として検討されてきた。それは旅に参加ができなくなった学生のモチベーションをどう維持させるかという問題である。この問題は全面解決には至っていないが、4.2で紹介した「新・文明の旅ボランティアチーム」を発足させたことにより、一部が解決していく方向へとつながった。よって、後半は旅に派遣される学生が受講生の中心となった。授業では、特に、英語でのプレゼンテーションの指導に多くの時間を費やしたが、十分とはいえなかった。この指導は、早い時期に、時間をかけてその実践を継続することが必要である。

旅から帰国後の前期授業「新・文明の旅総合講義」では、訪問大学での「学生会議」と呼ばれるディスカッションの体験を参考にして、グループや全体で話し合う機会を数多く設けた。そして、第2回プログラムに参加を希望する新入生に、上級生である派遣学生が指導・助言する立場で学習できる授業内容を加えた。これらの指導に関しては、それぞれの実践に効果があったと知見した。

「学生による授業評価」に見られる学習成果

(参考資料1)

2011年度前期 学生による授業アンケート集計結果表(科目別)

文京学院大学外国語学部・短期大学

科目名	新・文明の旅特講	区分	共通科目	履修者数	33
教員名	野口 由雄	曜日	火	時限	6
				回答者数	33

1 全学共通コア項目									
番号	設問文	平均点	回答率 (%)					無効回答	有効回答
			5 強く そう思う	4 そう思う	3 どちらとも いえない	2 そう 思わない	1 全くそう 思わない		
1	教員は、この科目の達成目標を明確に示したか	4.73	75.8	21.2	3.0	0.0	0.0	0	33
2	教員は、あなたがその目標を達成するために努めたか	4.79	78.8	21.2	0.0	0.0	0.0	0	33
3	あなたは、その目標達成のために努力したか	4.63	65.6	31.3	3.1	0.0	0.0	1	32
4	あなたは、この授業で十分な力がついたと思うか	4.41	50.0	43.8	3.1	3.1	0.0	1	32
5	この科目は、あなたの今後の生活に役立つと思うか	4.61	60.6	39.4	0.0	0.0	0.0	0	33

2 学部独自項目									
6	あなたは、この授業に積極的に参加活動したか	4.61	72.7	21.2	3.0	0.0	3.0	0	33
7	この授業で向学心をかき立てられたか	4.73	72.7	27.3	0.0	0.0	0.0	0	33
8	この授業は、理解しやすい授業であったか	4.58	66.7	24.2	9.1	0.0	0.0	0	33
9	この授業は、総合的に満足いく授業であったか	4.63	68.8	28.1	0.0	3.1	0.0	1	32

5.2 「帰国後アンケート」結果

訪問の旅から帰国1か月後に、同旅の「学び」の成果を調査する目的でアンケート調査を実施した。そのアンケート結果を中心に言及する。ここでは、同アンケートの結果をまとめるうえで、同プログラムの目標を次のように項目立てした。目標の「多様な国々の異文化を受け入れ、ともに考え、外に向かって自己と日本を発信し、多様な情報をキャッチし、新たな創造ができる人間を養成する」という文章から、「異文化理解」・「発信力」・「情報収集力」・「発想力」の4項目とした。また、最初に旅の「満足度」に関して、最後に「海外での経験」を同時に調査した。

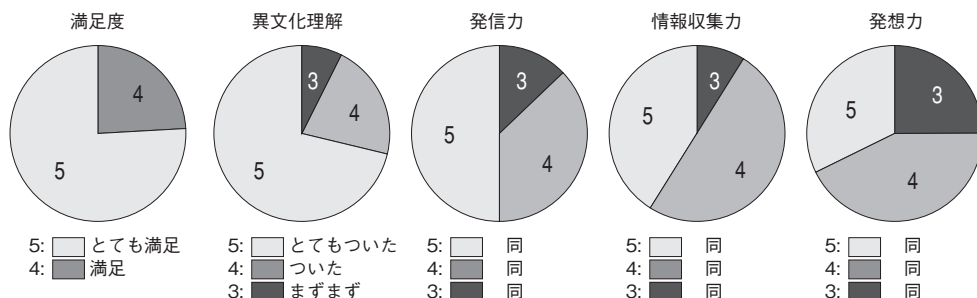
同アンケートの調査対象は、同旅に派遣した17名の学生に対して行い、以上の5項目に関するその達成度を自己評価による5段階で回答してもらい、それに記述での回答も加えた。また、同旅に参加する前の海外経験を、これが旅での「学び」の成果とどう関係するかについても調査した。帰国直後に長期実習に出た学生を除く16名からの回答を得た。

アンケート結果では「満足度」に高い評価があった。これは記述の回答でも、「おもしろい・素晴らしい・楽しい・よかった・うれしい」等の表現が多く、また、「知った・わかった・刺激を受けた・経験した・成長した」等の表現も多かった。そして、「異文化理解」には積極的に取り組んだ結果が見られた。これについては、旅において現地の人々と積極的に交流する場面を数多く知見したことと一致する。それらに比較すると「発想力」は、「学び」の成果とし

では低い数字が現れた。しかし全体として各項目に高い数値が表れているので、旅での「学び」が各学生の「学士力」・「人間力」の養成にプラスの影響を与えたと考える。

「帰国後アンケート」に見られる自己評価結果

(参考資料2)

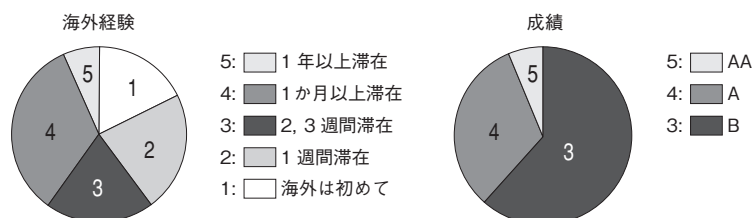


5.3 「海外経験」と「成績」・「クロス集計」結果

5.2 のアンケート結果における「学び」の達成度5項目と、同旅に行く前の海外経験と事前学習の成績の関係性について言及する。海外経験については、期間を優先して、「はじめて」と「1週間の滞在」……と、5段階に分け、次に訪問・滞在した国を考慮して、2か国以上の滞在を体験した学生については、その数字を1つ上の数字に置き換えた。海外経験については、高校時代に修学旅行、海外研修等で複数の国を訪れている学生がいると同時に、ほぼ同数の学生はこの旅が初めてであった。成績に関しては、前期「新・文明の旅特講-a」のGPA制度による評価結果を成績として使用した。(参考資料3)

「海外経験」・「成績」に関する集計結果

(参考資料3)



次に、上記自己評価結果5項目と、海外経験、成績を加えて、それぞれの項目に関係性があるか、統計処理ソフト SPSS Statistics version19 を使用して、クロス集計をした。ほとんどの項目間に強い関係性は見られなかったが、海外経験と発信力に中程度の関係性が見られた。これは留学経験が発信力を育むと考える。そして、異文化理解と発想力にも中程度の関係性が見られた。これは同プログラム目標の設定の妥当性と、同時に4.1で言及した知見を裏付けている。また、海外経験と成績との関係には中程度のマイナスの関係性が見られた。これは留学経験がインプット中心の授業で、障害となるか、評価されにくいと考える。(参考資料4)

「クロス集計」に見られる相関関係の図表

(参考資料 4)

		異文化	発信	情報	発想	成績	経験	満足度
異文化	Pearson の相関係数	1	-.262	.043	.471	-.406	.074	.120
	有意確率 (両側)		.327	.873	.066	.118	.786	.657
	N	16	16	16	16	16	16	16
発信	Pearson の相関係数	-.262	1	.412	.075	.055	.518	-.104
	有意確率 (両側)	.327		.113	.782	.839	.040	.702
情報	Pearson の相関係数	.043	.412	1	.366	.235	.432	.120
	有意確率 (両側)	.873	.113		.163	.380	.094	.657
発想	Pearson の相関係数	.471	.075	.366	1	.077	-.123	.241
	有意確率 (両側)	.066	.782	.163		.776	.651	.368
成績	Pearson の相関係数	-.406	.055	.235	.077	1	-.472	-.059
	有意確率 (両側)	.118	.839	.380	.776		.065	.827
経験	Pearson の相関係数	.074	.518	.432	-.123	-.472	1	.029
	有意確率 (両側)	.786	.040	.094	.651	.065		.915
満足度	Pearson の相関係数	.120	-.104	.120	.241	-.059	.029	1
	有意確率 (両側)	.657	.702	.657	.368	.827	.915	

5.4 旅における学生の「ふりかえり」

旅での「学び」が派遣学生にはいろいろな点で影響を与えてきた。ここに、「この旅の学びをどう受け止めたか」について記述回答した学生の文章を抜粋し、各項目に分類してそのまま記載した。これらの文章で調査結果の数字を補完する。

（旅の）満足度:「この旅は長距離の移動や日本での生活とは異なる点もあり、精神的にも体力的にもタフさが求められた。この旅を経験したことで臨機応変に対応することや忍耐力が身に付いたと思う。以前よりも自分に自信が持てるようになった。この自信をより強いものにしてこれから待ち受けるであろう様々な困難に立ち向かいたい。」

異文化理解:「(ルーマニアの) 教会の入り口にイコンを持ちながらお金を乞うロマの存在に人々はどう考えているのかとひまわりメンバー(日本語学習の集団)の一人に聞いてみました。ロマたちは一つの場にいるということが出来ない人種であり、移動してはお金に困りそれを乞うという行動に冗談ではないと思うと述べていました。確かに自分たちの習性に合わせて国も国民も動いてほしいというのは勝手な話であるということには同感である。しかしキリストの教えには平等という言葉が重くのしかかっていて、そのせいでロマを意識してしまうという。こういった文化はやはり我々日本人からすると異文化を感じる出来事であったと私は思う。」

発信力:「コミュニケーション能力が高くなったのではないかと思います。3か国の学生との会話もそうですが、移動中の飛行機などで初めて出会う人と進んで会話をするできるようになりました。『どこの出身ですか?』や『今からどこに行かれるのですか?』など簡単な英語ではあったのですが、人と会話をする楽しさを知ることができました。そして、つたない英語でも優しく接してくれる、人間の温かさを学ぶことができました。」

情報収集力:「訪問国のあいさつや宗教に関する知識、その国の歴史的背景は学べば学ぶほど現地での収穫も多いです。何も知らなければ、質問も薄いものとなってしまいますし、なにより人々との会話のネタになります。訪問した時の感動も増します。予備知識の大切さを改めて感じました。」

発想力:「今回の旅で、自分の中の視野を広げ、価値観を新しくすることができました。今までの私は、日本での基準にとらわれていました。例えば、今の自分の暮らしは普通だと思っていたし、学校に行くのは当たり前。常に周りの空気を読んでタイミングを計らなければ自分の意見は言えないなど、日本の今の生活を平均として捉えて、日々生活をしていました。今回の旅で海外に行ったことで、自分の価値観の狭さを自覚することができました。」

6. まとめ

「新・文明の旅」プログラムという長期計画は、全体として十数年、その2年半に及ぶプログラムの実践だけをとっても、その活動内容は多岐にわたっており、また、その情報量も莫大である。その中で、この旅における「学び」に視点をあて考察した。

事前・事後の授業を中心とした「学び」で受講学生は、各訪問国の政治、経済、民族、宗教、教育、社会諸制度、歴史的背景を学んだ。しかし、派遣先では、その指導してきた基礎知識が、訪問国の人々との交流の中でほとんど活かされていなかった。このことは学生の反省にもあった。そこで、学んだ知識、情報を再生できるまで指導する必要性を認識した。さらに、訪問国学生が自国の文化、歴史を詳しく説明する場面に何度も遭遇した。そこで、本学生の英語による説明はもちろん、母国語においても説明する力の貧弱さ、その指導の必要性も認識した。

各アンケートの集計結果と学生による「ふりかえり」は、この旅の満足度が高いこととともに、各項目での「学び」が大いにあったことを示している。その点において、同プログラムの教育面では目標達成度は高いものであった。これは、彼ら、彼女らの自信となり、それが姿勢、行動つながっていると知見した。また、クロス集計結果は、海外経験と発信力、異文化理解と発想力とに関係性があることを示した。つまり、海外経験による「学び」が発信力をつけること、異文化理解が発想力に影響することを示した。また、海外経験が授業での成績との間にマイナスの関係性を示すことも、今後の指導に参考となった。海外経験が豊かな学生には一般学生と違った指導法上の工夫が必要である。

そして、「学び」そのものについて考えた。内田樹¹³⁾は学ぶ力の3つの条件について言及している。「第1は自分自身に対する不全感。自分は非力で、無知で、まだまだ多くのものが欠けている。だからこの欠如をうめなくてはならない、という飢餓感を持つこと。第2は、その欠如を埋めてくれる「メンター（先達）」を探し当てられる能力です。第3が、素直な気持ち。メンターを「教える気にさせる」力です。オープンマインドと言ってもいいし、もっと平たく「愛嬌」と言ってもいい。」と。

同旅の感想を各学生から声として、文章として数多く収集してきた。多くの学生に共通して

表現されていたのは、上記にある第1条件の「不全感」である。もちろん言葉、記述にこの言葉そのものは使用されてはいない。この「不全感」が各学生の「学び」に影響を与えている。

最後に、1.はじめに-における「旅は学びを与えるか」に答えたい。「学び」そのものを明確にはできなかったが、少なくとも「新・文明の旅」がこの「学びの条件」を与えた。そして、この「学びの条件」は「学び」に不可欠なもので、それは各学生の今後の学生生活、そして考え方における変化、成長により影響を与えると考える。

注

- 1) 現在、「学習」と「学修」の使い分けが見られる。本稿ではさらに幅広い意味に解釈し「学び」とした。
- 2) 野口由雄(2009)「国際化の理解と教育現場の役割」、『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』8号 124-127頁、文京学院大学総合研究所
- 3) 多田孝志(2010)「グローバルな視野から見たこどもの生活体験と学校教育」『学校教育研究』25号、41-43頁、教育開発研究所
- 4) 国名については正式名称と通称をその場に応じて併用した。
- 5) インターネットとPCを利用して、遠隔地のスタッフ同士をつなぐコミュニケーションツール。豊富な機能により、同一オフィスにいるかのような、リアルな遠隔会議を実現できるが、会議と授業の違いを理解しての使用の工夫が必要と知見した。
- 6) 野口由雄(2011)「マレーシア短期留学プログラムへの一考察」、『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』10号 353頁、文京学院大学総合研究所
- 7) アクティブ・ラーニングという用語は包括的な概念であって、実際にそれは「学生参加型授業」「協調/協同学習」「課題解決/探求学習」「能動的学習」「PBL (Problem/Project Based Learning)」などと、扱う力点の違いによってさまざまに呼ばれている。
www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/journal/no7/16.pdf (12年8月検索)
- 8) 本学経営学部3年山崎純也の授業内におけるプレゼンテーションの一部を使用
- 9) 課題図書:「なぜ、ユーラシアか?」を理解させる図書として『ユーラシア胎動』・さらに理解を広げるために『文明の衝突と21世紀の日本』を必修とした。さらに・『ブルガリアンブルー』・『ルーマニアを知るための60章』・『言語の世界地図』・『常識の世界地図』・『新民族の世界地図』等を推選した。
- 10) 参考図書として 本名信行(2006)『世界の英語を歩く』集英社新書
- 11) 諸問題には、講師が直接指導する教室とそれを画像で受ける教室とに違いが生じ、後者が受け身になってしまうこと、機械の不具合、講師・学生とも不慣れな状況等があった。
- 12) 日本文化に関心のある「ひまわり」という市民団体。この団体の役員の多くがアレクサンドル・イオン・クーザ大学生 <http://www.himawari.ro/category/festivalul-tanabata/> (12年8月検索)
- 13) 朝日新聞全面広告 2012.4.22 朝刊「朝日求人」で、内田樹が「キャリアの扉にドアノブはない」を書いている。一回目(4/1)は「『適職』は幻想である」とのタイトルで、以下、「消費者マインドの弊害」(4/8)、「現実を涼しく受け入れよ」(4/15)と続いた。最終回(四回目)「人間の学びの3

条件」とサブタイトルがついている。

参考文献

本名信行 (2002) 『アジアの最新英語事情』 大修館書店

本名信行 (2006) 『英語はアジアを結ぶ』 玉川大学出版部

池田理知子・E.M. クレーマー (2006) 『異文化コミュニケーション』 有斐閣アルマ

佐藤郡衛 (2006) 『国際理解教育』 明石書店

内田樹 (2007) 『下流志向』 講談社

(2012.9.26 受稿, 2012.11.9 受理)